

〈書評〉

ロビン・M・ルブラン著（尾内隆之訳）

『バイシクル・シティズン
——「政治」を拒否する日本の主婦』

（勁草書房 2012年 335頁 ISBN 978-4326351626 4,095円）

大木 直子



日本政治における女性の過少代表性は、今やもっとも国際的に注目されている日本の課題である¹。政策決定過程において男性が主流派となっており、女性の立場や意見が反映されている可能性が極めて低いことは想像に難くない。しかし、日本政治における女性の不在は戦後一貫して続いてきた日本の「伝統」と見なされてきたため、日本の政治学において政治の男性性が問題視されていないだけでなく、日本の「ジェンダーと政治」研究においても「女性排他的で男性優位の政治文化である」という指摘に留まっている。

しかし、ルブランの『バイシクル・シティズン——「政治」を拒否する日本の主婦』は「郊外の主婦」という「普通の人びと」の視点から、日本政治の男性性を解き明かそうと試みた極めて意欲的で、なおかつ最も成功を収めた研究となっている。本書は、1999年に出版された*Bicycle Citizens: The Political World of the Japanese Housewife* の日本語訳である。これの基となったフィールドワーク調査は1990年代初めに行われたものであり、現在より20年近くも前の状況を記述したものである。しかし、「普通の人びと」と政治との関係を克明に描写した本書が、政治不信の高まる現在の日本において訳されたことの意義は大きい²。

ルブランは、東京郊外（練馬区大泉）での1年半にわたるフィールドワーク調査を行い、主婦が運営する地域福祉のボランティア活動、女性が主体の生活クラブ生協や生活者ネットの選挙運動、自民党所属の女性国会議員の選挙運動を詳細に記録した。それにより、非エリートである主婦の世界とエリート男性による「政治」の世界がいかに異なる形で形成され、相反する関係に至ったかを、両者の「乗り物」の違いから明らかにしようとした。すなわち、主婦の日常生活において「自転車」が最も有用な乗り物であるのに対して、エリート男性政治家は「タクシー」を多用しており、「自転車」市民（バイシクル・シティズン）と「タクシー」政治家はそれぞれ、移動するルートや道幅、目にするものが異なり、さらには公共的な空間への関わり方も異なってくる。ルブランは、主婦と従来の政治との乖離を「自転車」シティズンシップで捉えようと試みた。

「自転車」市民を分析視角とすることの意義は二つある。第一に、政治学の主流な方法論に対する挑戦である。ルブランは、主婦の政治参加を分析するにあたって、参与観察やインタビュー調査といったエスノメソドロジーの手法を方法論として採用している³。一般的に、政治参加に関する政治学の主流な方法は、大規模意識調査のような理論先行の研究手法が取られており、文化人類学的なフィールドワークの手法が用いられることは極めて珍しい。しかし、大量のデータを処理するためには、個々の対象者の差異を平準化しなければならず、結果的に、従来の分析から得られた「指標」や「尺度」を前提とした分析に陥る危険性がある。ルブランは、このような「タクシー」的な手法を避け、エスノメソド

ロジーという「自転車」的な手法を用いて、従来のリベラリズムのシティズンシップでは捉えきれなかった主婦の政治参加をありのままの姿で描くことを試みたのである。

第二の意義は、「主婦」アイデンティティの政治性を指摘した点である。住民の入れ替わりが激しい郊外では、出身地や学歴、子どもの年齢、夫の職業などについて主婦が共通のバックグラウンドを持つ可能性は少なく、したがって、地域コミュニティを構築することは至難の業となっている。しかし、「主婦である」という「主婦」アイデンティティを見出したことによって、主婦たちは、互いを結びつけ、ボランティア活動や社会運動、そして選挙運動にまで至る地域活動を展開することに成功した。ルブランは、「主婦」というラベルが、当の主婦たちにとって決して完全に満足するものではないものの、公共的な空間へと参入するために最も好まれるアイデンティティであることを指摘する。つまり、公的領域から排除された私的な存在として捉えられがちな「主婦」アイデンティティは、同時に公共的で政治的なアイデンティティなのであり、時には、例えば政党支持の表明といった政治的な態度よりも重要なアイデンティティとなりうるのである。さらに、生活クラブ生協や生活者ネットによる選挙運動の事例（第5章）では、主婦が、常に家族や家庭のことを気にかけて日々の生活のやりくりをこなすことによって、「暮らしに関する権威であり、その点で一日の大半を家の外で過ごす男性よりも優位に立つ」と自らを再認識する可能性も示されている。

ただし、「主婦」アイデンティティは、公共空間での活動を可能とする一方で、それらの活動を抑制する役割を果たしていることも特筆すべき特徴である。「自転車」市民は、家庭に軸があるため、家事・育児に支障を来さないことが最優先事項である。また、従来型の「政治」に対してお金や知識の面で素人であることも重要視されている。このため、地域福祉ボランティアの事例（第4章）では、事業拡大に伴い、活動場所と人員の確保の問題に直面し、結果的に「政治」のプロである行政側と協力することを選択した。また、自民党の参議院議員（当時）小野清子が「主婦」レトリックを用いながらも、非エリートの主婦には「タクシー」市民として拒絶され、ついに地域コミュニティに入りこむことはできなかった事例も挙げられている（第6章）。

ルブランは、結論において、主婦が自分のジェンダー役割に伴う義務と、政治的営みにおける義務との取引（トレードオフ）に慎重な態度を取ることの意味を再考する。主婦は政治的営み、政治家、政治組織を熟知し、それと同時に疑っているからこそ自分を中心に置いて既存政治との距離感を図っている。しかし、それは「政治に無関心である」のではなく、今まで語られてこなかった政治参加の新たな選択肢なのである。ルブランの言葉を借りれば、「自転車」市民の存在は、私利私欲にまみれた利益誘導政治を変えることはできないまでも、「タクシー」に乗れない人びと、乗りそうもない人びとに意思表示の方法を提示することができるという点で、リベラル・デモクラシーのシティズンシップを批判するモデルになりうる。「自転車」市民の政治参加は、家事、育児、介護といった人間が生きる上で誰かが担わなければならない社会的役割を誰が引き受けているのかを明らかにし、今後、誰がどのように担っていくのかという根本的な問いを私たちに問い続けているのである。これは、母親や養育者といった伝統的なジェンダー役割の「本質化」の側面を問題視するフェミニストが意図的に避けてきた問いでもあろう。「自転車」市民は政治的な営み、ひいては人間としての営みをより豊かで質の高いものとする上で、必要不可欠な存在なのである。

最後に、本書の時代性について検討したい。訳者（尾内隆之）のあとがきでも指摘されているように、著者のルブランが日本でフィールドワークを行ってから20年もの月日がたっている。しかし、そ

の間の社会的、政治的、経済的な変化を差し引いたとしても、本書の歴史的意義は失われていない。たとえば、現在でも「主婦」が「政治」を語ることは非難の対象となっている。最近の新聞報道によれば、都内に住むある女性は、東日本大震災の原発事故後、農作物等への放射能汚染による内部被ばくを懸念し自分の子どもが通う学校に対して給食の食材の産地に関する問い合わせをした際、学校関係者から「『絆を大事にしよう』って盛り上がっている時に、なんで水をさすようなことをするのか」と非難されたという（「民主主義 ここから5 原発だって語ろうよ」『朝日新聞』夕刊2012年11月26日）。政治的な発言は、それがどんなに身近な問題で大切な家族に関わるものであっても、地域コミュニティを乱すものとして捉えられがちである。このことはルブランが日本にいた20年前も現在も変わらない。

ただし、新聞記事の話には続きがある。その女性は共通の関心を持つ母親仲間と一緒に地域コミュニティに「会」を立ち上げ、自治体の行政や議会への意見表明を行ない、その活動を知った他の母親が次々に加わることになった。これも「母親である」というアイデンティティが「乗り物」となって女性を公共空間へと導いた成功例であり、本書の事例に通じるものである。しかし、現在、たとえば、インターネットが、人と人とを結び付けるネットワークの構築において、主流な「乗り物」の一つとなりつつあり、四半世紀近く前の状況と現在が全く同じだと言うことはできない。以上のことを踏まえると、今、「自転車のシティズンシップ」の有用性を再検討する時を迎えているのではないか。日本の「ジェンダーと政治」研究者の一人として、この課題に取り組んでいきたい。

（おおき・なおこ／お茶の水女子大学リサーチフェロー）

注

- 1 世界経済フォーラム（WEF）の「男女格差報告（The Global Gender Gap Report）」2012年版によると、各分野での男女平等の度合いについて、日本は参加国（135か国）中、101位で、特に、政治、経済では最低の水準にあり、早急な改善策が指摘されている。
- 2 ルブランの最新の著作 *The Art of the Gut: Manhood, Power, and Ethics in Japanese Politics*. University of California Press. 2010. は『ジェンダー研究』第15号（2012）にて紹介されており、本書『バイシクル・シティズン』とは対照的に「男性」の視点で描かれている。
- 3 同様のアプローチによる日本政治の考察と分析を試みた先駆的な研究として、ジェラルド・カーティス『代議士の誕生』（日経BPクラシックス、2009年。原著刊行は1971年）、朴喆熙『代議士の作られ方—小選挙区の選挙戦略』（文藝春秋、2000年）などが挙げられる。しかし、これらは、いわゆる「タクシー」政治家、またはその候補の個人的な後援会組織や地方の圧力団体、政党の中央組織と地方組織の関係性、「タクシー」政治家同士の相互作用などを取り扱っている点で、本書とは異なっている。